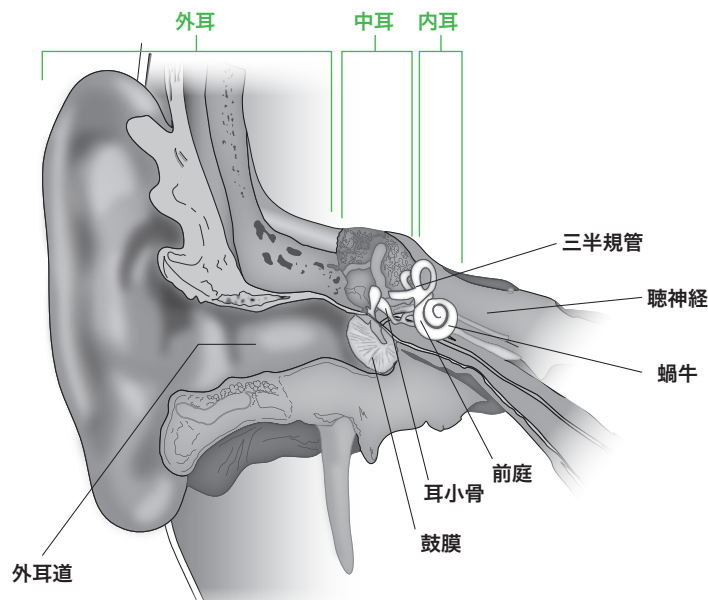


Q25

難聴やめまいを感じたら どうしたらいいですか？

抗がん剤のなかには、末梢の感覚器の障害を起こすものがあります。この感覚器の1つに耳があり、ここが障害されると難聴になったり、めまいを感じたりします。

下の図は耳の構造の模式図です。



音は外耳道を通り、鼓膜を振動させます。この振動は中耳の骨(耳小骨)を動かし、内耳へと伝わり、神経の働きに変えられ脳へ伝えられます。内耳には聴力にかかわる部分(蝸牛)以外に体のバランスをとる部分(前庭・三半規管)があります。抗がん剤は内耳の働きを障害することがあるため、聴力とバランスに影響が出て、難聴やめまいを感じるのです。バランスは聴力に比べ障害される頻度が低いため、めまいが起きる頻度は低いようです。また、めまいが起きても自然と回復することも多く、急性期の症状が取ればあまり問題にはなりません。それに比べ、難聴は治らないことがありますので注意が必要です。

難聴を起こしやすい抗がん剤に白金製剤(シスプラチンなど)、パクリタキセル(商品名パクリタキセル「NK」、タキソール)、ビンクリスチン(商品名オンコビン)、リツキシマブ(商品名リツキサン)などがあります。特に、白金製剤は様々ながんに使われ、これによる難聴の頻度は数%から30%程度といわれています。両側とも難聴になることが多く、高い音ほど障害されやすいので、たとえば、体温計の電子音の“ピ、ピ、ピ”といった音が聞き取りにくく感じたりします。

1回目の抗がん剤投与後にすぐに起きることもあれば、数回投与後に出現することもあり、発症時期は様々ですが、一般的に投与量、回数が増えるほど発症率も増える傾向にあります。約半数に自然回復があると考えられていますが、再投与により悪化し、徐々に回復が悪くなります¹⁾。

治療として、副腎皮質ステロイドホルモン、ビタミン剤などが用いられますが、残念なことに必ず効く薬はありません²⁾³⁾。難聴の程度、がんにたいする治療効果などをくらべあわせて、抗がん剤治療の方針を検討しなくてはなりません。治療で聴力が回復しない場合は補聴器を用いることで楽に聞こえるようにすることもできます。

ただ、抗がん剤による直接の副作用以外に、体重低下や放射線治療の影響による中耳炎などもあります。抗がん剤治療を受けられる方は比較的年配の方が多く、抗がん剤治療とは関係のない他の耳の病気が隠れている可能性もあります。治療で回復する難聴も多いので、抗がん剤の副作用と決めつけずに、一度耳鼻咽喉科を受診され、きちんと診察を受けられることをお勧めします。 (村上大造)



[参考文献]

- 1) 斉藤等 他：シスプラチンの聴力障害、耳鼻臨床77:1387-1393、1984
- 2) 塩野久子 他：シスプラチン難聴の可逆性、Audiology Japan46:157-163、2003
- 3) 脇坂浩之 他：化学放射線治療による聴器障害、日本耳鼻咽喉科学会会報117:840-841、2014